

第2回インフォメーション・ヘルスAWARD『アイデア部門』 応募用紙

○タイトル きっかけ：異なる視点との出会いを SNS で

○応募者氏名

または グループ名 杉本 幸大 (追手門学院大学 心理学部心理学科 人工知能・認知科学専攻)

○解決したい情報環境をめぐる課題

SNS や検索エンジンが、ユーザーの興味・関心に基づいてコンテンツを優先的に表示するフィルターバブルによって同じような情報ばかりが目に入り、異なる意見や視点に触れる機会が減少しています。

さらに、同じ意見を持つ人たちの集団の中で、類似した意見が繰り返されるエコーチェンバーによって、自分の狭い視点からの見解が「一般的な常識」として確立されやすくなり、結果として異なる視点からの多様な意見を受け入れることが困難になる傾向があります。

○アイデアの具体的な内容 (どんなもので、どんな人が、どう使うと、課題が解決できるのか)

目的

本提案は、SNS 上でユーザーが自然に自分とは異なる多様な意見に触れるための「きっかけ」を提供するシステムを設計することを目的としています。具体的には、人は「何を言われるか」よりも「誰が言っているか」に影響されやすいという心理特性に注目し、システムを構築します。ユーザーが好きなスポーツ選手、歌手、芸能人など、ユーザーにとって受け入れやすい人物(好意的に思う人物)が、ユーザーが持つ考えとは異なる意見を発信した場合に、その意見を優先的に表示させる仕組みを通じて、多様な意見に自然に触れられるようにします。

具体的な仕組み

1. 親近感を持つアカウントの特定: SNS 上での「フォロー」や「いいね」の履歴をもとに、ユーザーが親しみを持つアカウント (例: スポーツ選手、歌手、芸能人) を特定します。この際、フォローや「いいね」の頻度、コメント履歴などを基に、ユーザーにとって影響力のある人物をアルゴリズムで分析・抽出します。

2. 親近感を持つ人物の異なる意見の優先表示: ユーザーの投稿や行動履歴から、ユーザーの意見傾向や特性を分析し、その特性と異なる意見を持つ投稿が好意的に思う人物から寄せられた場合、それをタイムライン上で優先表示します。例えば、普段ネガティブな意見を持ちやすいユーザーに対して、好意的に思う人物が発したポジティブな視点を持つ投稿を優先的に表示します。このような形で好意的に思う人物の発言をきっかけとし、徐々に異なるバックグラウンドを持つ多様な人々の意見にも触れられるよう、さまざまなアカウントからの異なる視点を自然に表示させる仕組みを導入します。

3. ユーザー体験の工夫: ただ表示させるだけでなく、ユーザーに負担がかからない工夫をします。例えば、タイムラインに自然に溶け込む形で異なる意見を表示するモードを導入するほか、ユーザーが「異なる意見に触れたい」と思った時に選べるモードも用意します。自発的に異なる意見にアクセスできる柔軟な仕組みを組み込み、より自然な形で異なる意見に触れる体験をデザインします。

4. 期待される効果: このシステムは、ユーザーが普段は受け入れにくいと感じる異なる意見や視点に自然に触れるための「きっかけ」を提供します。ユーザーが好意的に思う人物を介して異なる意見に出会うことで、衝動的な拒否反応を和らげ、より自然に視野を広げることができる効果が期待されます。この仕組みによって、フィルターバブルやエコーチェンバーが生む情報の偏りを緩和し、異なる意見が多様に飛び交う健全な社会的対話を促進することを目指しています。結果的に、より深い議論が展開され、社会全体の理解が向上することが期待されます。

○**アイデアは未発表のものかどうか。すでに「試作」「試行」している場合は、新たに付け加えたいアイデア（ブラッシュアップするポイント）など**

このアイデアは未発表のもので、本提案の中心的な要素の一つは、ユーザーにとって信頼でき、好意的に感じる人物を特定するアルゴリズムの設計にあります。このアルゴリズムは、ユーザーが持つ特定のアカウントへ対する好意度を数値化し、その結果を SNS 上で効果的に活用することを目指しています。ユーザーが受け入れやすいと考えられる好意を持つ人物が発した、ユーザーの考え方とは異なる視点からの発言や意見を優先的に表示することで、多様な視点へのアクセスを促進し、偏見や誤解を解消する狙いがあります。

具体的には、以下の指標に基づき、ユーザーとアカウントの親近感を評価する仕組みを構築します。①「いいね」の頻度、②コメントの頻度、③コメントの文字数、④コメントの内容、⑤シェアの頻度、⑥フォロー期間の長さなどです。これらの指標は、SNS 上でのユーザーの行動パターンを細かく分析し、そのアカウントがどれだけユーザーに好意を持たれ、信頼されているかを測定するために使用されます。このような方法に基づき、特にポジティブな感情（例：共感、賛同など）が多く含まれるアカウントを、ユーザーにとって親しみやすく信頼できる存在として特定することが可能です。

本提案では、先進的な分析技術と豊富なデータ指標を組み合わせることで、ユーザーが自然な形で異なる意見や視点に触れる機会を増やし、SNS 上でのより健全な形で情報に触れることができる機会を増やすシステムを構築します。これにより、情報の偏りを緩和し、多様な意見が交わされる健全なコミュニケーションの場を提供することを目指しています。結果として、より多くのユーザーが視野を広げ、異なる意見を受け入れる力を養うことが期待されます。

○**アイデアを思いついたきっかけ**

このアイデアを思いついたきっかけは、「人は『何を言われるか』よりも『誰が言っているか』に強く影響されやすい」という心理的な特性に気づいたことでした。この特性は、私たちの日常生活や社会の中でよく見られるものであり、特に著名で影響力のある人物が発する言葉は、人々の意識や行動に大きな影響を与えます。

1991年に元 NBA 選手のマジック・ジョンソンが HIV 感染を公表した際の反応は、その典型的な例です。当時、HIV やエイズに対する偏見や誤解が社会全体に蔓延しており、多くの人々は HIV 感染を特定のコミュニティに限定された問題と誤解していました。しかし、ジョンソンはスポーツ界でも屈指のスター選手であり、世界中のファンから広く愛されていた人物です。彼が HIV に感染していると公表したことで、世間は HIV に対する根強い偏見や誤解を見直す機会を得ました。ジョンソンという象徴的な存在がこの病気について発言したことで、病気に対する社会の理解は大きく進みました。彼の勇気ある公表は、HIV 感染者に対する偏見を減らし、病気に対する社会全体の認識を大きく変えたのです。

このエピソードは、「誰が言うか」が発言内容以上に影響力を持つことを示す代表的な例です。彼の言葉は単なる情報提供にとどまらず、人々の考え方や行動を根本的に変える力を持っていました。この事例を通じて、私は「親しみを感じる人物や信頼される人物の発言が、人々の行動や意識を変える可能性がある」という心理的な特性を応用できると考えました。

特に、情報が溢れ、偏りやすい SNS の世界において、ユーザーが自分と異なる意見に自然に触れることは難しい課題です。だからこそ、ユーザーが好意を抱く人物や信頼する人物の発言を活用することで、異なる意見や視点に触れる機会を効果的に提供することが重要だと考えます。このアプローチを通じて、偏見や誤解が減り、多様な意見が健全な形で交わされる対話の場が生まれると信じています。結果として、社会全体がより豊かな情報空間を享受し、深い理解と寛容さを育むことができるのではないかと思います。